

左より) 丁さん、さとうさん、鄭さん

訪問日：2017.9.8 / エリア：京都

NPO 法人 京都コリアン生活センター エルファ



回答者

南 珣賢さん(NPO法人京都コリアン生活センターエルファ 事務局長) 鄭 明愛さん(同 作業所管理者・相談支援専門員)
さとう 大さん(同 作業所現場責任者) 丁 春燁さん(同 社会福祉士・精神保健福祉士)

活動の経緯

もともとは高齢の在日コリアン二世を支えるために、介護事業所として始まりました。国籍条項によって、長年社会保障制度から締め出されてきた在日コリアンが介護保険サービスをスムーズに受けることができるようにと、在日コリアン二世の女性たちが立ち上げました。利用者のうち、在日コリアンの方は90%程になります。

国籍条項が廃止され、1982年に年金に加入できるようになっても、そのときにすでに高齢だった方は年金制度に加入できずに無年金になっています。同様に1982年で20歳以上であることにより無年金になった在日コリアン障害者が裁判を起こしていましたが、無年金高齢者も、一緒に活動をするようになりました。障害のある子どもをもつ在日コリアンのお母さんからの相談も受けるようになりました。障害と在日コリアンという二重の生きづらさを和らげ、生き生きと過ごせる場所を作ろうと、共同作業所を作る計画が生まれました。一口500円のカンパを募り集めた約3,000万円と自己資金1,000万円でエルファセンターを建てることができました。だからこそエルファセンターは公的な施設と私たちは思っています。エルファ共同作業所は同じ敷地内にあり、在日コリアンは三分の一程度で東九条・南区以外からも通ってきています。スタッフが朝鮮語で話すのを聞いて、挨拶の言葉を朝鮮語で覚えたメンバーもいます。聴覚障害のあるスタッフやメンバーがいますが、朝礼の挨拶は手話で一通りみんなできるし、手を動かしながら話かけたり、何かものを書いてコミュニケーションを取ったり、しゃべれないからコミュニケーションを取らないでおうとする人はいません。

エルファの文化活動

エルファ友の会主催のエルファまつりが毎年6月にあり、そのときにデイサービスの利用者や作業所のメンバーみんなが集まります。まつりでは、職員の発表も盛んで、昨年は「水戸黄門」と「春香伝チュンハムジョン(李氏朝鮮の説話)」を合わせたストーリーを上演しました。デイサービスのスタッフが多才で、まつりのプログラムや日常的なレクリエーションもとても多様です。スタッフ自身が「エルファ笑点」で大喜利をしたり、歌手など呼んで鑑賞の機会を作ったり、利用者さんが参加して何かができる時間を必ず作るようにしています。

以前に、利用者さんが寸劇をされたこともありましたが、どじょうすくいをして、調理し、食べるところまでを見せるという内容のもので、小道具も利用者さん自身の手作りで、セリフはほとんどアドリブなので練習から本番までやる度に少し違う面白さがありました。

ここに通われている方は、遊びをすごく楽しんで参加されるし、発表する機会がお好きです。食事に関しても、美味しいものは美味しい、口に合わないものは合わないとはっきり表現されます。スタッフとしてもカルチャーショックと言っていにくい、驚きを感じます。

運営の中で取り組んでいる課題について

在日のネットワークは、厳しい差別の中、自分たちがお互いに助け合って生きてきたために、とても強いです。どこそこの誰、ということを通じてではなくても知っていることは多いです。そういう背景から、在日二世の中には、自分と全く縁のないところに入所したいと言って、あえて別の地域のデイサービスに行く方もいます。

一世の人々にとっては言葉や文化的な配慮がある、安心できる

在日コリアンが外国人であるがゆえに被ってきた「アイゴー」のため息と涙の人生を、笑顔と喜びに満ちた「エルファ」な人生に変えたいという仲間の想いから発足した団体。居宅介護支援、デイサービス、訪問介護等の高齢者支援事業、障がい者支援事業を実施。見学の受入れなど多文化共生事業にも力を入れている。

〒 601-8022
京都市南区東九条北松ノ木町 12
TEL: 075-693-2550
FAX: 075-693-2555

場所が必要でした。二世の方たちはまた違う問題を抱えています。ずっと日本人で通していた方が、デイサービス職員から差し出された名刺に本名で名前が書かれているのを見て、朝鮮人が本名で公的な仕事をしていることに感銘を受けたとおっしゃっていました。デイサービスを1日体験されたその晩、初めて安心してぐっすり寝られたという言葉から、それまでの生活がどんなふうだっただろうと思います。利用者の中にはエルファでは通名ではない本名で「生き直す」という方もいらっしゃいます。

二世の人たちは、自分はどこに帰属するのか、というアイデンティティーの葛藤が始まった世代です。日本の文化、食事、遊びなどにも馴染んでもいます。彼らにとっては、一世のように在日コリアンの文化を理解しているエルファでないといけないわけではありません。

エルファには人権学習などの一環で、先生が研修に来られたり、日本・在日・韓国の生徒さんがフィールドワークに来たりします。その時はできるだけ、利用者さんたちと生徒たちが触れ合ってもらうようにしています。利用者さんたちは人との違いを見つけることよりも、自分との共通点を見つけてそれを最大限に広げることがとても上手です。そんな利用者さんたちと触れ合っているうちに、子どもたちも自分を楽にさらけ出せるみたいです。時には泣きだす子もいて、中には在日コリアンとしてのルーツを持っていたり、それを隠して今まで生きていたりするのが分かることがあります。在日の辛い歴史を語るわけではないけれど、屈託のない笑顔のうらに隠れた悲しみや痛み、苦しみと触れ合いを通して子どもたちの心にちゃんと届いていること、そんなオーラのようなのものが、閉ざしていた子どもたちの心の扉をやさしく開けてくれるのだと感じます。

京都はもちろん日本各地、海外からも訪れる来訪者に「わたしちゃんと学校も行ってへん。なんも知らんのに、なんで外から次々と人が来るねん」と言いながらも、たくさんの方がエルファにやってくるということは、自分たちの存在が何かの足しになって

いるのだと感じてもらえていると思います。「はよ死ななあかん」という口癖が「まだまだ死んでられへん」に変わり、来訪者との交流を自分の役割として生きがいにしてくれています。

今は地域に住むニューカマーの一世（1980年代に日本にやってきた、生まれや育ちが韓国で日本に住んでいる人たち）の相談や利用が増えてきました。中国残留孤児の方々も介護保険利用者になりつつありますし、この辺りに住んでいるフィリピン人のお母さんたちが自分の母親を呼び寄せたいという声も聞きます。これからは色々な所で多文化化、多様化が進むでしょう。在日コリアンに寄り添ってきたエルファだからこそ、多様な文化的背景を持った人に寄り添うこともできるはず。エルファの可能性はまだまだ広がっていきます。